

# 騎士の才知、従者の智恵 —— セルバンテスの諺

野谷 文昭

## I

セルバンテスの代表作として、またスペイン文学の不滅の金字塔として世界に知られる『ドン・キホーテ』の魅力のひとつは、主人公のドン・キホーテとサンチョ・パンサという、強烈な個性を備えた、愛すべき主人公二人の間で交わされる対話にあるだろう。それは世界の文学に靈感を与え、たとえばアルゼンチンのマヌエル・プイグの代表作『蜘蛛女のキス』に登場する主人公二人のように、時空を超えて別のドン・キホーテとサンチョを生み出している。

機知とアイロニーに富んだこの騎士と従者の対話に彩を添えているのが、彼らが繰り出す諺 (refrán) や格言 (proverbio)、警句 (aforismo) の類である。作中用いられている諺に格言・慣用句 1299 例を加えると、およそ 1500 例が認められ、そのうち諺は 204 例、その使用回数は 256 回に上る<sup>1</sup>。それらは言葉の応酬にあつては強力な武器となる。また彼らがいかなる教養や思想の持ち主であるか、そのバロメーターとなるとともに、それらを用いる人物の異なる文化的アイデンティティを明らかにする。そしてそこには、翻訳を通してさえも読者に伝わる言葉遊びとしての面白さがある。さらに、それらはしばしば風刺の機能を備えているから、登場人物の間で消費されるだけでなく、言外の対象にも向けられ、彼らの舞台を観る観客としての読者への目配せにもなっている。言い換えれば、主人公二人の特異な身体性と相俟って、作者の哲学的言説をすぐれて動的かつポリフォニックなものにしているのだ。したがって、もしもそれらの要素、とりわけ頻出する諺を欠いていたなら、いささか大げさに言えば、この小説はかなり退屈なものになっていた可能性がある。ただし、諺は型にはまった言い回しでもあるので、『ドン・キホーテ講義』<sup>2</sup>を書いたナボコフなら、それがもたらす笑いのレベルは、芸術性という尺度に照らせば低いと言うかもしれない。だがそれはナボコフの美的基準であつて、この諺に満ちた作品の魅力とは別であることも確かなのだ。しかもセルバンテスは、諺という慣用表現を巧みに再利用し、あたかもそれが今生み出されたかのように効果的に使っている。たとえば後で見るように、サンチョ

が用いる諺のうち、「塩豚」に関連するものが5つあり、それぞれが一種のバリエーションになっている。よく似た慣用語が反復されることに気付いた読者は、個々に使われたときの面白さに加えて、そこにパロディがもたらすのに似たもうひとつの面白さを味わうことだろう。

小説中最初の諺は、実は主人公たちの対話に先駆け、作者の「わたし」が早くも「序文」で用いている。《わしのマントの中でなら王様だって殺す》<sup>3</sup>というのがそれで、自分の家にいるのなら、(読者は)何でも好き勝手にできる、ということの喩えになっている。つまり、作者は、読者がこの作品をどのように読み、どのように批評しようとかまわないと言っているのだ。「序文」用の諺としてはいささか不穏当に響くが、これは作者が一般読者とともに批評家や同業者を意識し、彼らに挑戦状を突きつけていることを意味するのではないだろうか。かりにそれが挑発なら、諺は匕首ともなり、この小説が鋭い批評性に満ちていることを予告してもいるだろう。いずれにせよ、これがセルバンテスの『ドン・キホーテ』における諺使用の皮切りである。

では、かりに諺が乏しかったら作品はどうなるか。実例を挙げてみよう。セルバンテスは『ドン・キホーテ』の前篇と後篇の間に短篇集の『模範小説集』<sup>4</sup>を出している。そこに収められた短篇のうち、「犬の会話」は文字通り全編がほぼ二匹の犬同士の対話からなり、二人の少年ピカロ(悪者)を主人公とするピカレスク小説的な作品「リンコネーテとコルタディーリョ」も対話が多い。ところがそれらには、諺やそれに類するものが不足しているどころかほとんどない。したがって、ドン・キホーテとサンチョの対話に慣れ親しんだ上でそれらの短篇を読むと、作品としての面白さはともかく、気の利いた諺の使用が見られないのが物足りなく感じられてしまうほどである。あるいは同じ短篇集の「ガラスの学士」では、狂人となった主人公が、あたかも賢者のように、気の利いた言葉を連発する。だがそれは諺ではなく、いわば人々のお伺いに対するありがたいご託宣であって、対話になっていない。だから、そこにはダイナミズムを生む双方向性がない。そのため、箴言や警句を羅列しているだけという印象を受け、脈絡がないので推進力が生まれず、文に流れができないのだ。

したがって、サンチョがいなければ、『ドン・キホーテ』は夢の中の出来事を再現したような、どこか物静かで寂しい悲劇的小説になっていたかもしれない。自分の言葉に耳を傾け、それに対する意見を述べたり半畳を入れたりしてくれる相

手がない騎士は、ハムレットのように独白するか、内的独白を行うしかないのだから。それに、小説はあのような大長篇にはなっていなかったにちがいない。ボルヘスがドン・キホーテの友人と見なす、サンチョという道連れがあつてこそ、開かれた空間での移動を連ねた長旅が可能になったのだ。もちろんサンチョが寡黙な男だったらやはり旅は続かないだろう。彼の饒舌が主人のそれとぶつかり合い、対話となることで、エネルギーが生じる。読者はそれに刺激され、ときおり飽きることがあつても、主従二人の対話を聞くためにどこまでも同伴したくなるのである。

短篇や詩など異種のジャンルを包摂するこの壮大な長篇は、器に合わせるかのように対話もきわめて長い。すでに触れた短篇にもかなり長い対話があるが、ジャンル上の制約もあり、それが連続することはまれだ。それに対し、ドン・キホーテはことあるごとに長々と持論を述べ、サンチョもそれに劣らず長広舌を振るう。そうした長い台詞に付き合うのは、少なくとも短くスピーディーな会話に慣れている現代の読者には、場合によっては苦痛かもしれない。その長さが物語の進行を遅らせるからだ。それを救ってくれるのが諺や格言、警句の引用である。それらはしばしば決め台詞としてスパイスのように刺激をもたらし、会話はもちろん文章全体にメリハリをつけ、リズムを付与する要素となり、遊びの要素により楽しませてくれる。しかもドン・キホーテとサンチョの言説の種類の違いがユーモラスなアンバランスを生み、これも大きな刺激となるのだ。

## II

セルバンテス自身は諺をどう考えているのだろうか。その前にまず、『ドン・キホーテ』の複雑な構造について確認しておく必要があるだろう。よく知られているように、この小説の原典は、アラビア人のシデ・ハメーテ・ベネンヘリによって書かれたアラビア語による作品で、それをバイリンガルのモーロ人がスペイン語に翻訳し、その翻訳をセルバンテスが第二の作者として編集したという設定になっている。したがって『ドン・キホーテ』は本来翻訳小説なのだ。だとすれば、ここで使われる諺も文化的コンテクストに合わせて翻訳されているのではないかという疑問が生じる。が、この架空の原作者はラ・マンチャ生まれということになっているし、訳した人物はモーロ人なのだから、そのあたりは巧みに処理してあるのだろう<sup>5</sup>。

さて、小説そのものについて批評を行うこの自己言及的な小説では、その要素である諺そのものもまた俎上に載せられている。ドン・キホーテ自身がサンチョに向かって、「諺というものは実によく真実を言い当てるものだ」、「いずれも、あらゆる学問の母ともいうべき経験から引き出された格言であってみれば、真実であるのが当然かも知れぬ」(前21)と言っているのだ。前篇の三分の一あたりなので、まだ主従の関係は固定的であり、サンチョはドン・キホーテが引く諺については何も評釈しない。二人の付き合いが長くなってからのサンチョなら、きっとここで諺の効用について何がしか意見を言うにちがいない。後で触れるように、彼は成長し、知識を披露するばかりか、相手の言葉を批評するようにさえなるからだ。けれど、ここではまだ、主人であるドン・キホーテが評価を一方的に行っている。

ドン・キホーテがイメージする諺とは、古の賢人による格言や金言で、出典が明らかなものであるらしい。このことは後篇で再確認される。ドン・キホーテはサンチョに向かって、「わしは以前にもお前に、諺というものは昔の賢人たちの経験と観察から引き出された短い格言であると話したはずじゃ。だから、その場にぴたりとこない諺など、格言というよりたわごとよ」(後67)とさえ述べている。ドン・キホーテにとって諺とはあくまでも教養の一部であり、美学的基準に基づいて用いるべきものなのだ。このことは、短篇「犬の会話」で二匹の犬のうちの一匹が、ラテン語の諺を持ち出す件を思い出させる。次に引用するのは、諺を巡る二匹の対話である。

ベルガンサ——いやね、学生だったころ先生の口から聞いたラテン語の諺を思い出したんだよ。学生たちはそれを格言と呼んでいたが、こう言うんだ—*Habet bovem in lingua* (舌に牛あり)。

シピオン——やれやれ、それにしてもひどく場違いなラテン語を持ち出したもんだな！君はもう忘れちゃったのかい、われわれが今しがた、スペイン語の会話のなかにラテン語を挿入する連中にけちをつけたのを？

ベルガンサ——だけど、このラテン語はこの場合にぴったりあてはまるんだよ。つまり、昔アテナイ人たちが使用していた貨幣のなかに、雄牛の刻印のあるのがあったので、賄賂を受け取った判事が義務を怠って、正しいことを言わないでいると、人びとが「あいつは舌に雄牛を持って

いる」と言ったというわけさ<sup>6</sup>。

犬のバルガンサは主人たちと学校へ通っていた時にラテン語を聞き覚えたことになっているが、対話の相手の犬シピオンもラテン語が理解できる教養の持ち主であり、二匹の対話の言説に落差はない。そのため諺あるいは格言を使っても、風刺の感触こそ伝わるものの、『ドン・キホーテ』にみなぎるユーモアはそれほど感じられない。

これに対し、格言を巡るやりとりでも、『ドン・キホーテ』の場合には、ユーモアに溢れ活気に満ちている。次に引用するのは、<sup>ケット</sup>毛布上げで弄ばれたサンチョの災難と百回も打ちのめされたドン・キホーテの災難の度合いを比べる件で、ドン・キホーテはひどい目にあったという点では自分のほうが上だと主張する。するとサンチョが言う。

「そいつはあたりまえでしょうよ」とサンチョがひきとった。お前様の話によれば、災難ってやつは、従士によりも遍歴の騎士に起こりがちだっていうからね。」

「それは思い違いだぞ、サンチョ」と、ドン・キホーテが言った。「ほらローマの金言にも、「頭が痛ム時ニハ……云々」というのがあるではないか。」

「おいらは自分の国の言葉しか分からねえです」と、サンチョが答えた。

「つまり、その金言が言わんとするのは」と、ドン・キホーテが続けた、「頭が痛い時には、体のほかの部分も同じく痛むということじゃ。すると、お前の主人であるがゆえにわしの体の一部ということになるが、この道理に従えば、わしに降りかかる、もしくはこれから先、降りかかるであろう災難はお前にもつらいはずであろうし、逆にお前の苦痛はわしの苦痛でもあるはずだということよ。」

「そうあってほしかったのですよ」と、サンチョが言った。「それなのに、おいらが体の一部として<sup>ケット</sup>毛布あげにされていたとき、おいらの頭ときたら、おいらが宙に舞いあがるのを土塀の外から手をこまぬいて眺めてるだけで、何の痛みも感じちゃいなかったんだよ。体の部分である手足に頭の痛みを感じる義務があるっていうなら、頭のほうだって手足

の痛みを感じなきゃならねえはずでしょうが。」(前 17)

土堀の外から眺めていた「おいらの頭」とはもちろんドン・キホーテのことである。このサンチョの言葉に、ドン・キホーテは、「あるときお前がその体にかけていた苦痛よりも、はるかに大きな苦悩を心に覚えていたからじゃ」と言い返すものの、形勢不利と見て、「だが、この頭と体の部分の問題はしばらくおくことにしよう、いずれまたじっくり考えて、適切な結論に達する折もあろうからな」と言って、話題を変えてしまうのだ。ここはサンチョが一本取ったと見なしていだろう。

教養ある「犬」たちとちがつてサンチョには、ラテン語(牛島訳では送り仮名がカタカナになっている)をちりばめたペダンティックな言説は通じない。金言が金言にならないのだ。そこでドン・キホーテが解説し、コミュニケーションは復活する。だがこのあとの機知に富んだ「道理」の応酬では、サンチョの方が優勢である。譬えとしての頭を文字通り身体の一部と見なして、見事に文脈にはめ込むのだ。だからドン・キホーテはあえてこの論戦を途中で終わらせてしまったのだろう。さらにここには、ドン・キホーテの精神主義とサンチョの物質主義という対照的特徴も見られる。

サンチョがここまで言えるようになるのは、物語がだいぶ進んでからである。彼は成長するのだ。もともと、前篇には彼がドン・キホーテに結婚を勧める件があるが、そのとき主人は従者が「そのように馴れ馴れしい調子で、そのように生意気な口をきく」ことを許さず、サンチョを槍で打ちのめしてしまう。サンチョが見違えるように能弁に話し出すのは、前篇の 10 年後に出た後篇においてである<sup>7</sup>。それに合わせるかのように、彼が用いる諺の数が一気に増える。そのことはドン・キホーテも気付いていて、次のように言う。

「(……) さあ、言ってみろ、お前は一体どこでそういう諺を探してくるのじゃ、この能無しめが? また、どうしてそんなにぼんぼんはめこむことができるのじゃ、このうつけ者めが? わしなど、たった一つの諺を見つけ、それをぴったり当てはめるのに、まるで大きな穴でも掘るかのうように苦労し、汗水たらしておるといふのに。」(後 43)

するとサンチョは、諺は自分の財産であり、今格好の諺が四つも浮かんだと言っ  
てから、だが「よく黙する者、そはサンチョなり」という自家製の諺を披露して、  
その四つが何であるか教えない。ドン・キホーテは「黙する者」という自己評価  
に呆れながらも、四つの諺が知りたくてたまらず、サンチョに教えるよう求め  
る。そこでサンチョは立て続けに四つ挙げ、ダメ押しに「愚か者も自分の家なら、  
他人の家にいる賢者より物が分かる」を披露する。そのとたん、ドン・キホーテ  
はそれを否定し、「愚か者は自分の家によいと他人の家によいと、何も分か  
らぬものよ、愚鈍という土台のうえに深慮の建物がたつことなど決してないから  
じゃ」と決め台詞を吐く。そして話題を変えるのだが、ここでは反証が可能な諺  
を媒介に、二人の間にほぼ対等な対話が成り立っている。しかし、あるときサン  
チョが諺を連発すると、あまりのくどさにさすがのドン・キホーテもたまりかね  
て、「サンチョよ、諺はもうたくさんだ」(後 67) と言いつくことになるのだ。

この小説全体において、204 例の諺が 256 回使用される中で、ドン・キホーテ  
の台詞では 69 回ほど使われている。これに対し、サンチョは諺を 159 回ほど使  
用している。その数ドン・キホーテの 2 倍以上で、しかもその多くは後篇に見ら  
れる。そして、公爵の城に主従で逗留した折に、サンチョの物言いや諺の連発が、  
ついに公爵夫人を驚嘆させるまでになるのだ。公爵が所有する島の領主になれる  
可能性を知ったことで、彼の農民的意識に変化が現れる。

とはいえ、サンチョの口を突いて出てくる諺とドン・キホーテのそれとでは、  
全体として見ると種類が違っていることは明らかだ。たとえば公爵夫人を驚かせ  
た諺の連発の件はこうだ。

「(……) それで、もし奥方様が、約束の島の領主の職をおいらに与え  
ねえほうがよいというお考えなら、それも神様の思し召しで、おいらが  
島なんか持たねえ人間として生まれてきたまでのこと。おまけに、なま  
じつかそんなものをもらわねえほうが、おいらの良心にとつちやよいこ  
とになるかも知れねえさ。そりゃ、おいらは愚か者だけど、あの「蟻に  
羽根の生えたが不幸の始まり」っていう諺の意味は、よく分かってます。  
それに、おそらくは島の領主サンチョより、従士サンチョのほうが楽に  
天国へ行けるってもんでしょう。「ここだって、フランスに負けねえう  
まいパンを焼いてる」し、「夜になりゃ、どんな猫だって豹に見える」し、



「午後二時まで朝食にありつけねえ者は衰弱する」し、「他人より手のひらひとつ分も大きな胃袋はねえ」し、胃袋なら下世話で言うように、「藁や干し草でも満たすことができる」し、「野の小鳥たちは神を食糧調達係に持っている」し、「クエンカ産の粗い毛織物四バーラは、セゴビア産の高級ラジャ四バーラより暖かい」し、「わしらがこの世をあとにして土のなかに入れば、王侯も日傭い人夫も同じように窮屈な思いをする」し、よしんば二人のあいだに背丈の違いがあったところで、「法王様の体が寺男の体よりよけいに地面を占領するわけじゃねえ」、というのも、わしらは墓穴に入る段になると、その場所に合わせて体を縮こめる、というよりは、否応なしに縮こめられて、はい、お休みなさいってことになるわけだからね。(……)」(後 33)

サンチョの饒舌はこの後も続き、「十字架の背後に悪魔がひそむ」、「光るもの必ずしも金にあらず」を引用している。公爵夫人が驚嘆するのも無理はない。だが、ここにはドン・キホーテなら使わないはずの諺もしくはそれに類するものがある。それは食物、食事、胃袋、食糧など食に関連する諺である。そもそもサンチョが最初に持ち出す諺が、「死人は墓へ、生きている者はパンへ」(前 19) というきわめて現実主義的かつ物質主義的なものなのだ。

サンチョは卑俗な性格の持ち主だが、揺るぎないスペインの伝統を踏まえている。農民的イメージにふさわしく、きわめて現実主義的であるからこそ、食に言及する諺を盛んに使う。だが、サンチョの言説は一義的な騎士の言説すなわち中世の世界の言説を相対化し、その硬直性を批評する役割を担わされている。中世・ルネッサンスの民衆文化の笑いについて論じているミハイル・バフチンによれば、「ドン・キホーテに対するサンチョの役割は、高尚なイデオロギーや礼拝に対する中世のパロディの役割、厳粛な儀礼に対する道化の役割、「Careme」(肉断ち)に対する「Charnage」(肉好み)の役割等々と対置することができる」<sup>8</sup>のだ。したがって、サンチョの諺を対置するためにも、まずはドン・キホーテの用いる諺を検証してみる必要がある。

### III

前述のように、ドン・キホーテは諺を 69 回使っているが、それらには共通す



る特徴がある。高邁な理想に燃える高潔な騎士(と自認する)彼にふさわしく、道徳・教養・精神すなわち抽象的観念に関するものが圧倒的な数を占める。しばしば教訓として使われるのも特徴と言え、そこにはドン・キホーテの意識における主従の固定的上下関係が反映している。もちろん、真の作者セルバンテスが、人口に膾炙した諺の中からそのような類の諺を選んで使わせることで、騎士ドン・キホーテの性格を浮かび上がらせているわけである。それらを便宜上さらに細かく分類してみると、おおよそ、徳、苦悩、恩、情、恋心、嫉妬、憂さ、教養、謙虚、堪忍、寛大さ、勤勉、主体性、侮辱、精神、死、希望、健康、飢えという項目が立てられる。煩雑になるのを承知で以下に列挙してみよう。ただし、牛島訳はしばしば諺の訳の後に説明的な文章を加えてあったりして長くなるので、文脈は分かりにくくなるが、『ドン・キホーテ』の諺研究を行っている山崎信三による簡潔な訳を採用し、意味が分かりにくいものには同氏による解説を施すことにする<sup>9</sup>。

#### 1) 徳

- \* 血は受け継がれるが、徳は自ら獲得するもの。(後 42)
- \* 徳行はそれ自体において、血統の持ち得ない価値を秘めている。(後 42)
- \* 徳行は善人によって愛されるよりは、悪人によって迫害されることの方が多。(前 47)

#### 2) 苦悩

- \* 清き思いゆえの苦悩は、不幸というよりはむしろ天の恵みとみなすべき。(後 12)

#### 3) 恩

- \* 心こもる世話に悪しき報酬(恩を仇で返す)。(後 66)
- \* 恩知らずに親切を施すは、大海に水を捨てるようなもの。(前 23)
- \* 忘恩は傲慢の娘。(後 51)

#### 4) 情

- \* 逃げる敵には銀の橋を架けよ。(後 58)

#### 5) 恋心

- \* この場にはいない者は、疑心暗鬼を生じ不安になる(恋する者の心)

理状態)。 (前 25)

6) 嫉妬

\* 嫉妬が招くは不快と恨み、そして苛立ち。(後 8)

7) 憂さ

\* 歌う人は憂さを払う。(前 22)

8) 教養

\* ホメロスも時には注意散漫。(後 3)

\* プラトンはわが友、そして誠実はさらに良き友(礼儀、情愛には誠実さを最優先せよ)。(後 51)

\* 詩人は生まれるのであり、作られるものではない(持って生まれた才能がものをいう)。(後 16)

\* ペンは心の舌。(後 26)

\* 槍が筆を鈍らしたことはなく、筆も槍を鈍くしたことはない(軍人という職業と文筆活動が相容れないわけではない)。(前 18)

9) 謙虚

\* 謙虚なる者を神は称える。(前 11)

\* 神を畏れるところに智慧が生まれる(慎重さ、分別、沈着さ、公正さを伴う行動)。(後 42)

\* 自画自賛は値打ちを下げる。(後 16)

10) 忍耐

\* 神は悪人どもを我慢なさるが、いつまでもというわけではない。(後 40)

\* 驢馬は重荷に耐えるが、それにも限度がある。(後 71)

11) 寛大さ

\* 厳格な判事は、寛大な判事には勝てぬ(厳格な正義よりも寛大な慈悲のほうがよい)。(後 42)

12) 勤勉

\* 勤勉は幸福の母。(前 46)

13) 主体性

\* 各自が自身の運命の織り手。(後 66)

14) 侮辱

\* 侮辱されたことのない人は誰をも侮辱できない（子供や田舎者が、思慮の浅さゆえに侮辱されることはなく、彼らが賢者を侮辱することもない。侮辱は地位・身分のある人たちの沙汰）。(後 32)

15) 精神

\* だらしない格好はたるんだ心のあらわれ。(後 43)

16) 死

\* 死は最たる不幸、しかし立派な死であれば、それは何にも勝る。(後 24)

17) 希望

\* よき希望はさもしき所有に勝る。(後 7、65)

18) 健康

\* 昼食は控えめに、夕食はさらに控えめに。全身の健康は胃袋が管理。(後 43)

19) 飢え

\* 藁でも干し草でも（食べられさえすれば、食材の良し悪しは問うまい）。(後 3)

\* 飢えと欠乏ほど貧しき者たちの心をさいなむものはない。(後 51)

このように整理すると、やはりモラリスト、ロマンティスト、オプティミストといった、いかにもドン・キホーテらしい性格が見えてくる。ここで例外的なものに触れておくと、18) と 19) の項目に分類した諺は、むしろサンチョが使いそうである。しかし、18) は食と関係があるものの、そこで言おうとしているのは過食の戒めであり、称揚されているのは健康なのだ。また 19) の飢えの項目に挙げた《藁でも干し草でも云々》は、実はサンチョも使っている。ただし、ドン・キホーテはこれを転用し、本来の意味とは別のことを言おうとしている。登場人物であるドン・キホーテが小説『ドン・キホーテ』を批評するという、有名な場面だ。彼は「作者がどうして本筋とはかかわりのない小説やら物語やらを挿入する気になったのか」とメタ小説的構造に疑問を投げかけた後、そうした要素を藁や干し草、すなわち単に苦し紛れに本を膨らませるための要素に喩えているのである。もちろんここには自己言及的ユーモアがある。また、「飢えと欠乏……」は、バラタリア島領主になったサンチョ・パンサに宛てた手紙の中で用いられている。ド

ン・キホーテは「人民の意を得んがために留意すべきこと」として、誰に対しても礼節を守ること、食糧の十分な備蓄に努めることを挙げ、後者の理由を「飢えと欠乏ほど貧しき者たちの心をさいなむものはなきが故」としているのだ。要するにドン・キホーテ版君主論の一環として、治められ、飢える側ではなく、治め、飢えさせる側からの視点でこの諺は使われている。

一方、サンチョのキャラクターは、民衆知を備え、生活者としての経験則に通じている人物であり、ブッキッシュで観念的なドン・キホーテ及びその前身のアロンソ・キハーノとは対照的である。サンチョは世故に長け、単純でありながら聡明で複雑な人物であり、その性格は変化する。

バフチンはサンチョをこう評している。「サンチョ(《パンサ》)の肥った腹、飲み食いの欲望は根本的にまだ深くカーニバル的である。豊富と充実の愛着は根本において、個人的・エゴイスティックな、分離的性格をまだ持つてはいない。これは全民衆の豊かさへの愛着なのである<sup>10</sup>。」サンチョは諺を159回ほど使用しているが、前述のように、農民的イメージにふさわしく、きわめて現実主義的で、食料、食事、胃袋(空腹)などに言及する諺を盛んに使う。その一方で、価値や権威を転倒させるような諺も使用する。そのため、ラブレーの『ガルガンチュア物語』にはもちろん及ばないが、バフチンのカーニバル理論が当てはまる好例となっている。以下、サンチョの用いる諺を、ドン・キホーテの場合と同様、分類してみよう。

## 1) 塩豚

- \* 塩豚がありそうな所に釘がない(意外、期待外れ)。(後 55)
- \* 釘のあるところに塩豚がない(あるべき所にあるべきものがない。期待外れ、見当違い、見掛け倒し)。(後 73)
- \* 塩豚のないところに釘はない(吊るす必要がないから、当然といえば当然)。(後 10)
- \* 釘もないのに塩豚はあると思いき勝ち(早合点する)。(前 25)
- \* 釘のある所に塩豚があるとは限らぬ(先入観、早合点、勘違い)。(後 65)

## 2) パン

- \* パンを焼いたりこねたりする人からパンを盗るべからず(つつま

しく働き生計を立てる人からパンを奪ってはいけない。／経験者を騙すことは困難。(後 33)

\*パンは頂いたがお供はごめん(恩知らずを叱る)。(後 7)

\*裕福な家では夕食もすぐにととのう(才能や教養の豊かな人は、生じた困難に対する方策、ふさわしい解決法を持っている)。(後 30)

\*苦悩もパンがあれば少なくなる(財産があれば心労は軽くてすむ)。(後 13、55)

\*ここでもフランスに負けない美味しいパンができる(いいものはどこにでもある)。(後 44)

### 3) 豆

\*よその家でもそら豆を煮るが、わか家では大鍋いっぱい煮る(誰しも問題は抱えている。したがって、他人をとやかく言う前に自分を見つめてみよう)。(後 13)

### 4) 蜜

\*蜜になってご覧、蠅に食われるよ(あまりにも温良な人は誰にでも利用されやすい)。(後 49)

### 5) キャベツ

\*キャベツと籠を混ぜこぜにする(場違いな、あるいは関係のない話を持ち出す)。(後 3)

### 6) ほうれん草

\*ほうれん草に目がない婆さんは、青葉も枯葉も残さない(最初は興味を示さなかったものが、一度味をしめると、後には過度に執着するようになる)。(後 69)

### 7) 菊芋

\*海に菊芋を求める(不可能なことを求める)。(前 30、後 3、20)

### 8) 卵

\*雌鶏は卵のあるところに卵を産む(何かを為すためには刺激が必要)。(後 7)

### 9) 農業

\*乾いた不毛の土地でも、肥料を施して耕せば、よい収穫をもたらす(たゆまない努力は問題を克服し、成果をもたらす)。(後 12)

10) 菓子

\*これまでのところは、甘い菓子か絵に描いた餅みたいなもの（問題の核心にはほど遠い）。（後 2）

11) 餌

\*鼠に食わせるものを猫にくれてやれば、手間も省ける（逼迫した状況の対応に手間取ってはいけない。最善のタイミングと対象の判断も大切）。（後 56）

12) 空腹

\*藁でも干し草でも（腹は膨れる）。（後 33）

13) 食

\*どこに生まれるかではなく、どこで食するかである（氏より育ち）。（後 10、32、68）

14) 空腹

\*腹が気力を生むのであって、気力で腹がふくれはしない。（後 47）

ドン・キホーテとは対照的に、物欲や世故に関するものも目立つ。それらは本人の物欲や世故を示すと同時に、それ自体への批判ともなる。《裸で生まれた私は今も裸。失ったものも得たものもない》これはバラタリア島の領主を退くときの名台詞だが、サンチョの変化と成長を示しているとも取れるだろう。以下はサンチョの物欲と世故を示す例である。

15) 物欲・世故

\*知識よりも財産の脈を先にとる（人の値打ちは金次第）。（後 20）

\*贈り物は岩をも砕く。（後 35）

\*資産家相手に遺恨は晴らせぬ（権力や金がものを言う）。（後 43）

\*強欲は袋を破る（二兎を追うものは一兎をも得ず）。（前 20、後 13、36）

\*長者のたわごとが格言となる。（後 43）

\*他人より手の平ひとつ分も大きな胃袋はない（欲の皮を張ってみても仕方がない／大同小異）。（後 33）

\*お前の値打ちは財産次第、多いほど値打ちも上がる。（後 20）

\*子牛をもらえるときは手綱持参で駆けつけよ（好機を逸するな）。  
 (後 4、41、50、62)

#### IV

セルバンテスは、ドン・キホーテとサンチョを一つの世界に同居させたが、メキシコの作家カルロス・フエンテスが指摘するように、本来ドン・キホーテは叙事詩のヒーローであり、サンチョはピカレスク小説に登場する現実的なピカロ(悪者)である。騎士道小説を読みすぎて理性を失ってしまったドン・キホーテは、はるかな過去に住んでいる。一方、サンチョは身近な現在に生きていて、彼の唯一の関心事は日々を生き抜くことである。何を食べようか、今夜はどこで寝ようか、という具合に彼は発想するのだ<sup>11</sup>。

小説の中では二つの<現実>が共存していて、読者はそれを同時に見ている。だが違和感はない。むしろその状態こそリアルな現実と言うことができ、一義的で一枚岩的な現実に対する批判となっている。そのリアルな現実において、ドン・キホーテとサンチョは対照的な存在でありながらも共存し、冒険と対話を繰り返すことで生じる相互浸透の効果によって、やがて融合する。諺は、それが謎掛けであることによってまず相手の関心を呼び覚まし、対話に参加させる機能を果たす。諺は互いの性格を固定的に反映するばかりでなく、相互浸透の効果によって、その用いられかたも変化する。読者はサンチョが放つ諺の変化に、彼自身の成長を認めることができるだろう。先に見たように、サンチョの場合、諺の数が増えるだけでなく、食を中心とする具体的なものに、抽象的、観念的なものが混じるようになる。スペインの碩学サルバドル・デ・マダリアガの言葉を借りれば、「サンチョの精神が現実から妄想へと上昇していく」<sup>12</sup>のだ。ただし、バフチンによれば、サンチョの変化は民衆性の喪失を意味しているという。

ドン・キホーテの同一性を認めるためには他者が必要であり、うってつけの他者としてサンチョが作られたのだろう。また、登場人物はすべてドン・キホーテに対する他者としての役割を果たしている。ドン・キホーテとサンチョは友情で結ばれていると同時に、夫婦のような関係にもあり、サンチョは女房役を務めている。実際、相棒の不在がついにはドン・キホーテに孤独をもたらささえする。サンチョのバラタリア島領主赴任に伴う別離の場面がそれである。

相互浸透は、具体的にはサンチョが主人の高潔さ、想像力に感染し、ドン・キホー



テ化すると同時にドン・キホーテもまた現実との関係においてサンチョ化する、すなわち、彼の「精神は次第に妄想から現実へと下降する」<sup>13</sup>という形で描かれる。サンチョの方が不断に変貌し、重層的、両面的性格を示すのは、ドン・キホーテが騎士道物語の枷に縛られているのに対し、サンチョは自由人であり、そうした枷に囚われないからである。彼は外的現実が変化しても、それに柔軟に対応できるのだ<sup>14</sup>。そして最後に訪れるドン・キホーテの覚醒は、中世的世界への決別と言える。古に書かれた、物語が破棄されるのである。

バフチンは言う、「ルネッサンスの時代には、笑いは最もラジカルで普遍的な、いわば世界を抱擁する形で、歴史にただ一度だけ五、六十年間にわたり(国により時期も異なるが)民衆の奥底から民衆の(《卑俗な》)言語をもって、大文学と高尚なイデオロギーの中へと突進して来たのである。そしてボッカッチョの『デカメロン』、ラブレーの小説、セルバンテスの小説、シェイクスピアの劇、喜劇等々の世界文学史上の作品の創造に重要な役割を果たした」と<sup>15</sup>。

バフチンが<カーニバル的>と評するセルバンテスの小説、中でも代表作『ドン・キホーテ』には笑いが満ちているが、そこにはドン・キホーテとサンチョという対照的な「カーニバル的ペアー」がいる。そしてサンチョの<卑俗>な言葉とキホーテの高尚な言葉の衝突がポリフォニックな空間を作るとともに笑いを誘う。彼らが用いる諺は、笑いの元となる。そしてその諺の変化は、主人公のキャラクターの変化(とりわけサンチョの成長、民衆性の喪失)と同時に、近代における小説自体の変化、すなわちバフチンが指摘した、「大地と宇宙のつながりが断たれる」<sup>16</sup>兆しを示してもいるようだ。だからこそ『ドン・キホーテ』は、近代小説の嚆矢なのだろう。

(注)

1. 山崎信三『『ドン・キホーテ』に見ることわざ』『『ドン・キホーテ』讃歌』行路社、1997年、101 - 108頁。
2. ウラジーミル・ナボコフ（行方昭夫、河島弘美訳）『ナボコフのドン・キホーテ講義』晶文社、1992年。
3. ミゲル・デ・セルバンテス・サアベドラ（牛島信明訳）『ドン・キホーテ』前篇、岩波書店、1999年。以下、引用の際は原則として本書前・後篇を用い、引用箇所は、前篇第1章の場合（前1）、後篇第1章の場合（後1）のように略号で示す。
4. セルバンテス（牛島訳）『模範小説集』国書刊行会、1993年。
5. 稲本健二「セルバンテス・マジックのタネ明かし 『ドン・キホーテ』前篇のテキストをめぐって」『『ドン・キホーテ』を読む』行路社、2005年、205 - 207頁。
6. セルバンテス『模範小説集』、463 - 464頁。
7. 刊行年は前篇が1605年、後篇が1615年。
8. ミハイール・バフチーン（川端香男里訳）『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』せりか書房、1985年、27頁。
9. 山崎信三『『ドン・キホーテ』のことわざ』『ドン・キホーテ事典』行路社、2005年、131 - 166頁。
10. バフチーン、前掲書、26頁。
11. カルロス・フエンテス（牛島訳）『セルバンテスまたは読みの批判』書肆風の薔薇、1982年、36頁。
12. サルバドール・デ・マダリアーガ（牛島訳）『ドン・キホーテの心理学』晶文社、1992年、227頁。
13. マダリアーガ、上掲。
14. 牛島信明『ドン・キホーテの旅 神に抗う遍歴の騎士』中央公論新社、2002年、122頁。
15. バフチーン、前掲書、68頁。
16. 同上、27頁。

※本稿は、2008年11月15日に明治大学において開催された、ことわざ学会主催のシンポジウム「文豪とことわざーセルバンテス・シェイクスピア・ドストエフスキー」における口頭発表を元に、新たに書き下ろしたものである。

## **El ingenio del caballero y la sabiduría del escudero: Cervantes y el uso de los refranes**

Uno de los encantos de *El Quijote* está en los diálogos de sus dos protagonistas, a los que dan atractivo una gran cantidad de refranes llenos de ingenio e ironía. Los refranes funcionan no solamente como arma en el intercambio de palabras sino también como barómetro del mundo en que vive cada uno de ellos. Desde el principio Don Quijote vive en el mundo de la epopeya, mientras que Sancho vive en el mundo de la novela picaresca. De ahí que sus discursos sean diferentes y creen un espacio polifónico que, sin embargo, gracias a la intermediación de los refranes se convierte en diálogo. Es así como los dos caracteres se van acercando poco a poco, hasta compenetrarse y fundirse.

En este artículo comprobamos que se reflejan los caracteres de los dos protagonistas en los refranes que usan y observamos, sobre todo, los progresos de Sancho reflejados en el cambio de la cantidad como de la calidad de sus refranes. Según Bajtin *El Quijote* es una novela carnavalesca y está llena de risas porque existe una pareja contraste y carnavalesca. El dice que nos hace reír el choque de las palabras vulgares de Sancho y el lenguaje refinado de Don Quijote. Y tiene razón, aunque los refranes también sirven de indicadores del progreso paulatino de Sancho, por un lado, y de la paulatina pérdida de su esencia popular, por el otro. El cambio de esos refranes, en sí, anuncian la llegada de la era moderna y el cambio de la novela.